

日本国内のコウモリに関する 50 年間の研究動向を精査 —朝日の影に：日本におけるコウモリ研究と保全のシステムティック・レビュー—

概要

保全活動の優先度を定めるために科学的証拠は極めて重要ですが、研究の取り組み度合いが、必要な保全活動と必ずしも一致するとは限りません。日本におけるコウモリ類（コウモリ目）の保全は、34%が固有種で、そのうち 90%が絶滅危惧（絶滅寸前、絶滅危惧、危急）あるいはデータが不足していると IUCN が指定していることから、世界的に関心を持たれています。しかしながら、日本のコウモリ類に関する情報については、国際的にはアクセスが難しい場合もあり、研究動向についてはこれまでに体系的なレビューが行われたことがありませんでした。

京都大学大学院情報学研究科 Christian E. Vincenot 助教、大手信人 同教授、Jason H. Preble 同博士課程学生は、日本において、コウモリの保全のために研究がどれくらい十分に対応しているかを調べるために、国際自然保護連合 (IUCN) のカテゴリーごとに、過去 50 年間の保全に関する研究論文を体系的にレビューしました。情報のギャップがどこにあるか、将来において優先すべき研究課題が何であるかを特定するために、研究実施時期、地域、研究課題、分類、固有性、及び IUCN カテゴリーにおける研究の分布パターンを評価しました。また、国際的な研究論文のリポジトリ (Scopus および Web of Science) と国内におけるリポジトリ (CiNii) について、研究のパターンを比較しました。

その結果、IUCN のカテゴリーには、時期的な変化はないことが判明しました。この間、研究による知見は蓄積されているが、実際の保全の状況に変化はありませんでした。コウモリに特化した保護のための法令や公的な保全活動は限られています（例えば、公的な保護増殖事業によって保全されたのは 1 種のみでした）。2000 年以降、研究事例は増加しているものの、絶滅危惧種・固有種についての研究は、非絶滅危惧種・非固有種に関する研究よりも事例が少数です。最も絶滅が危惧される種を含む、現存するコウモリ類の約 50%について、生態学的な研究が不足している状況（1 種について論文が 1 編以下）は、憂慮すべきものです。また同様に、半数以上の種については保全に関する研究も不足しています。以下の 10 種の固有種は、最も優先的に研究を進めなければならないと考えられます。

- クチバテングコウモリ *Murina tenebrosa*
- ヤンバルホオヒゲコウモリ *Myotis yanbarensis*
- リュウキュウテングコウモリ *Murina ryukyuana*
- クビワコウモリ *Eptesicus japonensis*
- リュウキュウユビナガコウモリ *Miniopterus fuscus*
- オガサワラオコウモリ *Pteropus pselaphon*
- クロホオヒゲコウモリ *Myotis pruinus*
- コヤマコウモリ *Nyctalus furvus*
- カグラコウモリ *Hipposideros turpis*
- モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi*

固有種についての研究が増加し、種ごとに絶滅の兆候についての情報、生息に必要な条件、個体群動態や適切な保全戦略が提供されることによって、日本におけるコウモリ類の保全は強化できると考えられます。具体

的な保全計画が立てられること、研究論文の公開が進むこと、実務者の保全に関する能力開発が進むこと、加えて、種々のグループが協力することで、日本国内の状況を改善することができます。これが実現すると、アジアにおけるコウモリ保全について、良い模範となると考えられます。

<論文のタイトルと著者>

タイトル In the Shadow of the Rising Sun: A Systematic Review of Japanese Bat Research and Conservation (朝日の影に：日本におけるコウモリ研究と保全のシステマティック・レビュー)

著者 Jason H. PREBLE, Nobuhito OHTE, Christian E. VINCENOT

掲載誌 Mammal Review

DOI 10.1111/mam.12226

キーワード コウモリ、計量書誌学、日本、言葉の壁、研究－実務間ギャップ、研究の優先順位づけ、絶滅危惧種